曹子建碑

593年
（隋・開皇十三年）

古典碑帖の窓⑦

木雞室
伊藤　滋

「曹子建碑・選字各種」

「陳思王曹子建廟碑」「陳思王碑」「曹植廟碑」とも称する。この碑は、左頁の図版に見るように、一見すると不思議な書風である。前回は、隋時代の新旧両様を代表するようなそれぞれの書風を示した。今回は、一碑の中に、新旧両様の書風を混在させた「曹子建碑」を示した。先人はこの碑について、「篆隷の遺意あり」とか「古撲」「奇古」などの言葉で表現している。仔細に書風をみると、篆書、隷書、楷書の用筆を確認できる。上の図版は、こうした特徴ある文字をいくつか分類して示した。Aは、力強い、重厚な筆致の楷書体、Bは、横画に美しい波磔を具えた八分隷書体（起筆が楷書である）、Cは、字画構成は篆書体（点画の起筆が楷書、一部に隷書の筆画が混じる。）Dは、右払いの太い点画に補筆が加えられた珍しい筆画を具えた文字である。碑文の中には、一文字の数画の中に楷書、隷書、篆書の筆画を見ることができる。楷書体をベースにして古い様式を一つの書体に取り入れた書風であろう。こうした書風の萌芽は、北魏末の碑や墓誌銘に見られる。北魏末から東西魏、北斉、北周と時代を経るに従い、多く見ることが出来るようになる。このような北魏末から隋時代にかけての篆書や隷書、また篆隷混在の書風を、書道史の本の中には、「洗練されていない幼稚な書風」「野性味を帯びた書風」と評しているが、如何なものであろうか。

「曹子建碑・整拓本」

「曹子建碑」部分

書道芸術院
平成の書（2009）

第59回書道芸術院展

宮澤梅径
財団法人書道芸術院
理事

今日でいう「現代書」の殆どは昭和の時代に生まれ、昭和に育った。私の所属している刻字もまた同様である。書道芸術院の刻字は偉大な先達である香川峰雲先生（日本刻字協会を設立し書壇に刻字分野の地位を確立）長揚石先生（中国・韓国等と交流を計り国際刻字連盟を結成）のご指導の下発展してきたのだが残念ながら両先生共に急逝され、続いて院の篆刻刻字部の次期指導者として嘱望された千田得所先生も早逝されてしまう。正しく院の篆刻刻字部は暗中模索の状態となり、残された夫々の社中は、活路を求めて研鑽努力を重ねてはいるが、今日まで先生方にご指導いただけたら、また新しい道が開けたのではないかと推考もするのである。

さて現代の刻字は、篆刻界から変化を遂げたものであり、古の石刻との大きな違いは「自書・自刻」をモットーとする事である。書は無論、彫刻・絵画・色彩等芸術の全てを網羅し、煩雑な工程や労力を要する刻字はつい敬遠されがちだが、一度経験すれば、その工程を経て作品が完成してゆく魅力に「書分野にこんなに楽しい道があるのか」と刮目するのである。また刻字作品の中に漢字・仮名・現代詩文書・前衛など諸分野に渡る多彩さを見ることは「刻字」が書芸術の中での新しい芽萌えであると確信できるのである。特筆すべきは、古文の造形の妙・象形文字の躍動感等の表現に於いては刻字をして他にその魅力に敵う分野は多くないと言う事である。

しかし、刻字の減退を危惧し、心を痛めている同志は少なくはないだろう。私達には使命がある。心血を傾注しこの道を切り開いてくださった先達の意志を必ず次の世代に継承していかなければならない。魅力溢れる刻字分野の今後の発展には書芸術として完成度を高めるためには何が必要なのかを常に研究し研鑽し発表していくことが大切である。

書のひろば

理事長　恩地春洋

白雲先生の人と書
―川崎白雲先生生誕一〇〇年記念展を終えて―

芸術は全て、人間の生きざまの記録である。この世に「生」を受けるのは個人の意志ではない。「生きる」ということは、時代との戦いであり、自分自身との戦いでもある。

川崎白雲の生きた時代は明治、大正、昭和、平成の激動の時代であった。白雲作品はその上に生まれたものである。逆境を逆に生きるエネルギーとした積極的な人生観に共鳴する。書の魅力は人間の魅力である。

1、生誕から敗戦まで（1909～1945）

明・42・6・1　高知市鏡生まれ

大15（17才）高知県師範入学、川谷横雲先生に師事

昭9（25才）大阪に出る（小学勤務、富田林高女、池田師範勤務）

昭20（36才）太平洋戦争敗れる

2、民主主義の書の模索（1946～1962）

昭21（37才）高知師範勤務（5年）

22　書道芸術院に参加審査員

26（42才）公職を辞して大阪へ

27　筆友会発足（中川雨亭・水嶋山耀先生らと池田・高知・大阪の門人達と）

32（48才）毎日書道展審査員（この間、貫名菘翁を中心に、伊藤神谷、手島右卿先生らの書法を吸収すると共に「新書芸」と名付けて、造形的な書の研究につとめる。外国人に書を教え視野を広める）

3、アメリカ巡遊二か月（1963～1969）

昭38（54才）イーデス・ハンソンさんと渡米（各地で書展、揮毫会）海外活動の草分け、その記録「ブラシの詩人」出版（帰国後、世界の人々に理解される書、絵画的、造形的な書に変貌していく。赤シャツ、ベレー帽、指輪と生活まで一変する）

44（60才）梅村社と改称する

4、書の原理を追求する（1971～1982）

昭46（62才）突然離阪、日本各地を転々とし、書道界を引退

徹底した臨書によって独自の書境開拓に専念される

美代子夫人同伴

以後「白雲」と号す

51（67才）「梅村社解散する」と沖縄より便り、門人相寄って「玄遠社」を興す

57（73才）帰阪、玄遠社幹部の為に「白雲書話会」を開く（この10年間、和歌山県熊野・信州上田・大分鉄輪・沖縄など、わずか郵便の消印での想像に留まった「旅先にて」とあるばかり。放浪の旅の苦難をお察しした。この時の臨書記録、孟法師・九成宮・風信帖など、小さな雅仙紙一枚に一字ずつ、折帖も、出版された古典もある。九州大分飯田高原に住まれた時が平和な心豊かな時ではなかったかと想像したり…）

5、書の一般化と人間の探究

昭62（78才）「川崎白雲書展」文芸春秋画廊（主催　玄遠社）

平元（80才）鏡村名誉村民となる

白雲作品の創作、臨書など二千余点を鏡村（現高知市）に寄贈する

平2（81才）「川崎白雲書展」鏡村主催

平7（86才）鏡村文化ステーションＲＩＯ完成、3F「ギャラリー白雲」白雲作品常設展示

平8（87才）「川崎白雲・松岡雲峰とその一門展」東京セントラル美術館

平10（89才）卒寿お祝いの会

鏡村改革構造センター

平12（91才）川崎白雲小さな書展

草津市脇本陣

平16（95才）川崎白雲先生を囲む一門展

平16・11・14　草津市にて逝去

書の原理追究の後期から禅の本など書の精神性の追求のため思索にふけった

故郷の鏡で生活をした数年は村民との対話を通して平明な言葉を書くなど書の一般化に務め、技術的には左手の世界を拓いて、味わいのある書の世界を定着させた。

21世紀の書
―私の主張―

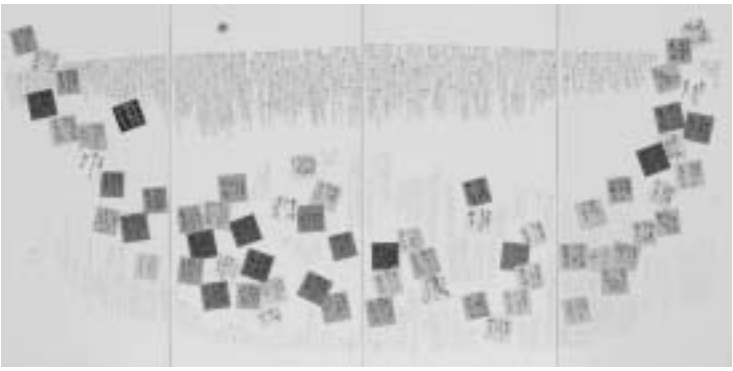
前衛書 (一)

千葉蒼玄

部門という枠はどこから生まれたのだろう。今現在私たちは漢字、かな、近代詩文（現代詩文）大字などその形態と主張により細分化してきた。ともすると私は何々部だから他の部はわからないと言う人までである始末である。専門分野的になるのは深く掘り下げる意味で大切なことではあるが、他の美を理解しないで新しい発見はないのではないだろうか。時代的に見ても前人のものを参考にし、エキスを吸収して新しい書が生まれている。

前衛書が生まれた時には絵画の影響もあり、様々な技法が試され現在の形に集約されてきたが、現在では前衛書といえばだいたい想像がつくほど様式化されてしまった。形を作ることそれは時代の欲求により生まれるものであるが、一度それが様式化されたときにはそれを打ち壊してゆく勇気も必要だと感じる。

今回の作品は第2回燦華展に出品したものである。奥の細道全文を屏風四曲にかなの貼り混ぜの様式を用い細かい字で背景を描いた。上部はみちのくの山なみを下部は芭蕉の歩いたみちのりをイメージした。一字一字は読めるが模様として絵画的に見ていただければと思う。かなと近代詩文のクロスオーバー的な作品であるが、現在の展覧会の枠では部を決めかねる作品である。私にとってはこれも一つの前衛書だと考える。



「光陰・奥の細道」　千葉蒼玄書

漢字 (一)

前田龍雲

21世紀の書について私の主張をこの紙面で述べなければならないとは思いもよりませんでした。頭が固く、なかなか新しいことが苦手で語彙の少ない私は、毎日書道展では一文字ないし二文字で表現（主張）する大字書部所属であります。

あくまでも現時点で私が日頃感じていることを綴らせていただきます。お付き合いいただければ幸甚に存じます。

まずは私の臨書感から。

『書道芸術』の読者の皆さんの多くは、基礎は漢字の臨書とお思いでしょう。ひらがなも漢字から生まれたものですから。常にこのことは私も頭の中にあります。どの時代のどんな書体書風のものを臨書するかは、個人の好みや学書進度によって違ってくると思いますが、学書する上で古典の臨書は切っても切れないものだと強く思います。

臨書には「形臨」と「意臨」に分けられることがあります。形臨とは字の形、筆の使い方等を見たとおりに書く事。意臨とは筆意から書いた人の気持ちを考えて書く事。といわれますが、ともすれば形臨は「形や筆使いだけでよい。」「意臨は筆意だけでよい。」と誤解されがちなので個人的には分けたくはありません。

第二回壘土舎展出品
前田龍雲書

書話シリーズ 378

初めての写経

木村安閑
（現代詩文書部・審査会員）

友人が還暦の記念に四国八十八ヶ寺の巡礼の旅に出発していると聞きました。私も、主人が定年退職したら一緒にマイカーでのんびりとスタートし最寄の温泉も楽しみつつ巡礼の旅をしたいと思っていました。ところが友人曰く、巡礼バスツアーがお勧めよ、何も知識がなくても一人からでも参加でき、お参りの作法、お経の上げ方、心構えなどを教えてもらえるので予備のつもりで一度参加してたらいいよ、とのアドバイスをうけ暑い夏を避け、ほんの軽い気持ちで一昨年9月より、参加させていただきました。

四国は一度書芸の夏季講習会で高知に行ったことはありますが、その時はただ、ここは四国だと思うだけでした。

月に一度廻るわけでまだ、二十ヶ寺しか廻っておりません。落ち葉を踏みただ一人黙々と寺から寺へと歩きます。友達との旅行も楽しいのですが、こうして知らない人達と歩き、般若心経を上げお線香、ロウソクと上げて結構楽しい自分がいます。そして立ち寄る寺々に写経をしてきた般若心経を納経して帰ります。

恥ずかしい話ですが、これまでに私は一度も般若心経を書いたことがありませんでした。これを機会に書いていますがなかなか思うようには書けません。今まで他の人が展覧会等で書いているのを見てすごい、こんなの書くって大変だろうなぁ～と思うくらいで、自分が書こうとは思ってもみませんでした。書いてみて初めて解かることですが、一枚書くのに小一時間かかります。一字、一字間違えないように書くのにはとても骨がおれます。一つのお寺に二枚置きますから最低でも百七十六枚書くことになります。間違えたり字が気に入らなかったりしますので三百枚は書くこととなるでしょう。今まで細字をしたことがあまりありませんので、小筆も手当たり次第使ってみています。疲れていたり気持ちに余裕がない時はどうしてもうまくいきません。書きたらないのは重々承知していますが、書いているときは無心になっている事がせめてもの慰めです。

まだまだ般若心経の中身はよくわかりません、八十八ヶ寺廻り終えるとき少しでもいいから解かるといいなぁ～と思っています。

今は私が先に行って先達さんの導きによりいろいろなことを習っています。巡礼に参加されている方達が全員般若心経を書いて来て納めているわけではありませんが、私は書道を少しでもしている身としては写経を是非したいと思いました。写経の功徳は第一に心の安定が得られる。一人机に向かって一心にお経を写すのは邪念を滅却して一点一画に全神経を集中することができる。清々しくなる。楷書できっちり書かれた長文の細字です、最初は肩がこり目はチカチカしていましたが何時の間にか一行、また一行と書いています。

いつも私は写経する前に手を洗い礼拝して筆を持ちます。

私が今こうしてここにお経を書ける幸せに感謝し、また四国巡礼をする事が出来る事に多くの人に感謝です、まだまだ二十ヶ寺を廻っただけでなにも解りません、こうして般若心経を書こうと思う気持ちにさせられた四国の自然に触れちょっとしたことで四苦八苦している自分がとても小さく見えます。

般若心経のことが書かれている本を読んだり、写経の方法、練習法、名蹟を見たりしています。様式や作法があるかと、思いますが、私は書きたい時、ただ黙々と自己流に書写しています。そして厚かましくも、友人より頂いた一字蓮台経用の用紙に書き表装したいものです。

展覧会に出品するとかそんなつもりはありません、形あるものはすべて無になります、と書かれています、本当にそう思います。今を楽しみつつ今日も又、一枚書き上げようと墨を磨りました。

合掌

巡礼の旅にて

第45回　書道芸術院単位認定講習会（成田）

会場＝成田ビューホテル
会期＝平成21年8月22日（土）～23日（日）
主管＝南関東総局（総局長　板垣　洞仙）

報告　山口　仙草

南関東総局では10年ぶりの第45回書道芸術院単位認定講習会が、成田ビューホテルで開催されました。この講習会は、書道芸術院の事業の中では、各部の研究活動を理解するとともに、審査会員昇格のための勉強の場として定着しており、今回も受講者158名、役員、講師、助講師計27名、総勢186名の参加となりました。

開催時期が夏休みということもあって、会場の決定や宿泊の手配等々、いろいろとご迷惑をお掛けしましたが、何とか開催にこぎ着けることができました。本当にありがとうございました。

開講式に引き続き、講習に入りました。恩地春洋先生の院史では、沿革として、書道芸術院の歴史と最近の院の活動についてのお話がありました。次に、「川崎白雲先生を中心にして」と題し、書道芸術院創立発起人でもある先生のこれまでの作品についての解説がなされ、川崎白雲先生の恩地先生との関係や、国際的にもご活躍された人となりについて理解することができました。最後に今年の秋季展の役員作品の紹介と解説をいただきました。

〈開　講　式〉

《篆刻》
講　師＝後藤大峰先生
助講師＝小野澤旭堂先生
佐藤香山先生

既に字入れをした印材が用意されており、「方正」の二字を印刀で彫ることから始め、初めての方も多かった中、講師の丁寧な個別指導のもと、立派な印が完成いたしました。

〈院史〉恩地春洋理事長

後藤大峰先生にご指導受ける

《現代詩文書》
講　師＝小竹石雲先生
助講師＝大平邑峰先生

〈篆刻〉刻する受講生

小竹石雲先生講義

小竹石雲先生揮毫

大平邑峰先生揮毫

「漢字とひらがなの調和について」と題し、DVDによる実技指導の後、薦季直表（鍾繇）により、古典から現代詩文書への展開、筆の使い方等の指導がありました。その後、千葉に関係する詩歌により作品の制作にあたりました。

《前衛書》

講　師＝太田蓮紅先生

助講師＝千葉華紅先生

「古典と前衛書」と題し、古典をどのようにアレンジして発展させるか、創作の仕方、素材の選択、筆の特徴についての講義の後、半紙作品に挑戦し、前衛書作品の制作を楽しんでいただきました。

太田蓮紅先生揮毫・講義

千葉華紅先生揮毫

一日目の最後は、特別講演として、「近現代の書と成田山書道美術館」と題し、学芸員の**高橋利郎先生**による講演が行われました。書道美術館は、江戸時代から現代までの日本の書を収蔵の中心としており、企画展等積極的に開催する等、書愛好家に親しまれております。先生の講演は解かり易く、話題も豊富で充実したものとなりました。これからも現代書を後世に残せるようご活躍をいただきたいと思います。

強行日程の中で、懇親会は参加者一同疲れも見せず、大野祥雲先生の乾杯の音頭で始まりました。半田藤扇実行委員の進行で皆、和やかな会となり、抽選会では、地元の物産や書道用具等のご提供があり、受講者の皆さんに大変よろこんでいただきました。

高橋利郎先生講演

大野常務理事による乾杯ご発声!!

〈懇親会〉

サプライズとして、辻元先生より、昨日（21日）に審査会が行われた秋季展の「**秋季菊花賞**」の報告があり、受賞者の中には講習会参加者もおり、驚きと喜び一杯の楽しい会となりました。

〈抽　選　会〉

〈秋季菊花賞〉発表！
受賞者のみなさんの表情

二日目の

《かな》

講　師＝下谷洋子先生

助講師＝木村東舟先生

「俳句を書く」というテーマで講義、実技指導の後、課題の制作を行いました。線質、墨色、リズム、落款についての指導をいただき、それぞれ立派な作品が提出されました。

〈かな〉下谷洋子先生講義

《漢字》

講　師＝大野祥雲先生

助講師＝川島舟錦先生

「争坐位文稿を学ぶ」と題し、沢山の資料を用意していただき、先人の臨書作品の紹介から実技指導、臨書から創作への展開の仕方等、充実した講習となりました。

下谷洋子先生揮毫

〈漢字〉大野祥雲先生揮毫

種谷萬城先生による**原拓書道史**では、貴重な拓本が展示され、篆書、隷書の肉筆作品、木簡、竹簡関係図書も展示され、詳しくご説明をいただき大変勉強になりました。原拓のスケールの大きさを目の当たりにし、しっかりと書作の中に取り入れて行きたいと思いました。

金木和子先生による拓本の採り方は、受講生が皆、興味深く目の前での拓本の技量、妙技に魅了されました。

また、拓本の種類、用具、マナー等ご指導をいただき、大変参考となりました。

閉校式では、単位修得証を受講生代表・宮城の安藤華祥さんに授与され、謝辞は受講生代表・大分の山崎皐月さんが述べられ、辻元大雲常務理事の講評、板垣洞仙南関東総局長から次回開催地の四国支局長大野祥雲先生へ引き継ぎが行われ散会となりました。

川島舟錦先生より
ご指導を仰ぐ受講生

〈原拓書道史〉種谷萬城先生講義

金木和子先生採拓の講義

その後、成田山書道美術館の見学には、バス二台約90名の参加があり、「近現代日本の書のながれ」を前日の講師の高橋利郎さんにご案内いただきました。書道芸術院歴代会長の作品も展示されており、現代書壇の源流をたどることができ、有意義な研修となりました。

二日間の講習ではございましたが、緑豊かな環境の下、会員相互の友情を深めよい成果があげられたものと思われます。講師、助講師、役員の皆様のご支援とご協力、参加いただきました受講者の皆様の暖かいご理解のもと無事終了することができました。ありがとうございました。

以上報告とさせていただきます。

〈謝　辞〉

〈認定書授与〉

〈成田ビューホテル・講習会場にて〉

古典鑑賞

㉓③ 漢字研究部

喪乱帖（王羲之）①

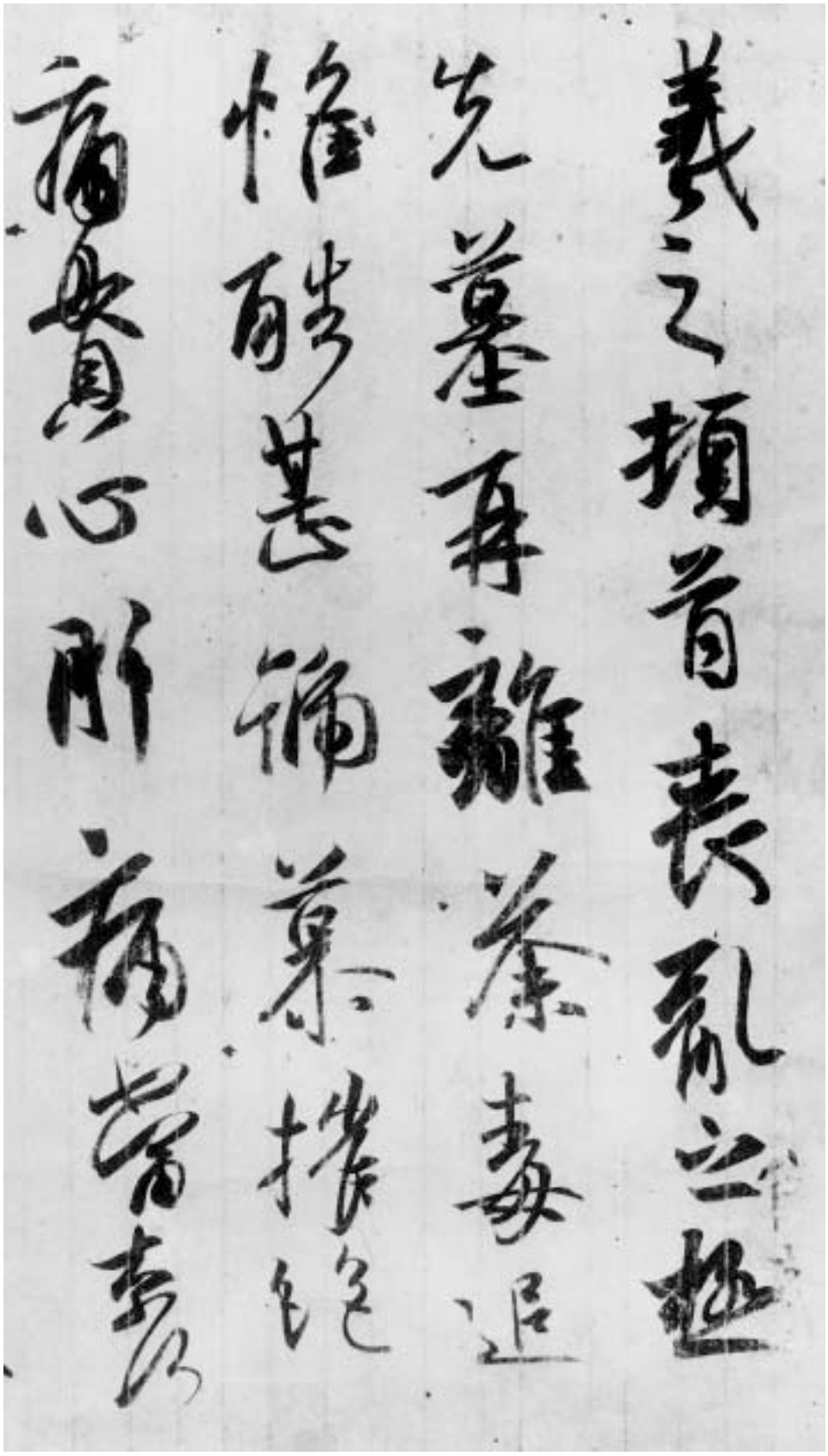
〈解説〉喪乱帖は、京都御所東山文庫に現蔵する御物で、軸装されている（国宝）。本幅は縦に簾目のある白麻紙で28.7×63.0㎝。奈良時代に舶載されたらしいが、詳細は不明である。光明皇后が聖武天皇の遺愛の品々を東大寺盧舎那仏に奉納されたうちの一つとみられ、かつては正倉院に蔵せられたものと考えられている。初行の「之極」の右に「僧権」の左半の文字があるのは、鑑定家の押署である。王羲之の間然するところのない書境は、この作に象徴されており、いわゆる〝王法〟の特質を随所に示している。（編集部）

用紙　半紙普通判

＝注＝

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる
署名、もしくは○○臨
（押印のみも可）

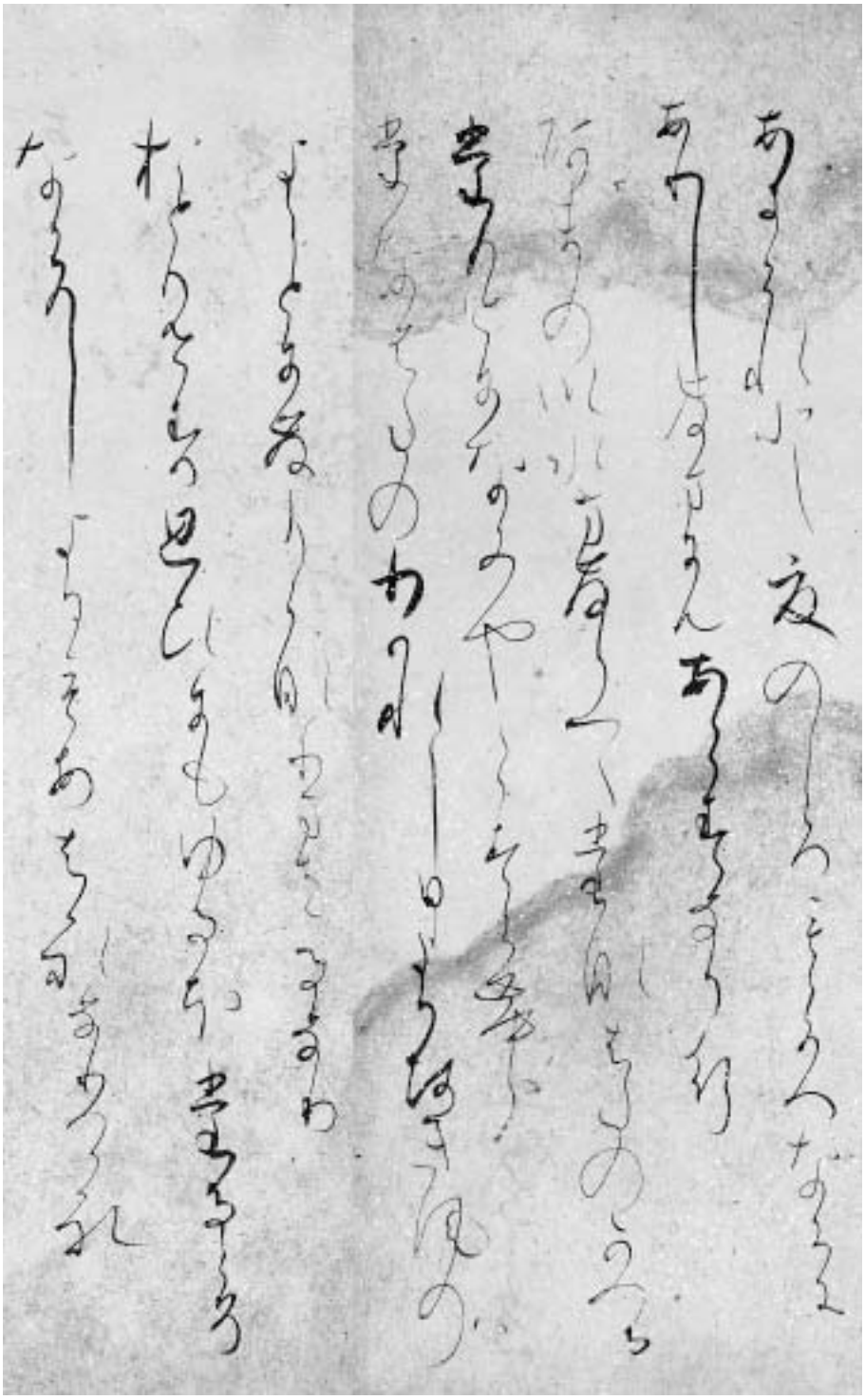


羲之頓首。喪亂之極。／先墓再離荼毒。追／惟酷甚。號慕摧絶。／痛貫心肝。痛當奈何

古筆鑑賞

⑥⑦ かな研究部

重之集（伝・藤原行成）①



〈よみ〉
あきくれど夏のころもゝかへなくに
ありしさまにもあらずなり行
あまの川水まさりつゝたなばたのかへる
たもとになみやこすらむ
たなばたのわかれし日よりあき風の
よごとにさむくなりまさるなり
おとせず思ひにもゆるほたるこそ
なくむしよりもあはれなりけれ

〈解説〉源重之は三十六歌仙の一人。貞元二年の三条左大臣頼忠前栽歌合に出詠するほか若い頃より歌人としての活躍が知られる。

素紙と薄藍の雲形を漉き込んだ雲紙の一面に雲母砂子を撒いた料紙を交用した綴葉装の冊子本に調整される。

春部より秋部までは和歌一首二行書きである。非常にリズミカルに筆を運んでおり、流麗で繊細な筆致で書写され爽快な趣が感じられる。

※上記の掲載歌一首以上を書く（全臨も可）

用紙
・半紙普通判（料紙可）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）

漢字規定　初段以上【十一月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

辻元大雲選書

雲浄天高　よみ（雲浄く天高し）

書体＝自由

習い方解説 (一)

辻元大雲

雲浄天高
（雲浄く天高し）　虞世南

今回から担当します。上級では書体自由ですので参考手本にとらわれず色々工夫研究してください。

虞世南の語より秋の爽やかな気候を詠んだ四字句を選びました。穏やかな気風の行書表現で、使用筆は羊毫中鋒でかなり使い込んだものを使いました。行書での表現の場合、運筆のリズムが肝要です。さらに点画の省略などは多くの古典を参考に、バランスよくまとめたいものです。字典での確認はもちろんですが、あまり特殊な字形は避けた方がよいようです。

漢字規定 秀級以下 【十一月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

小伏小扇選書

灯火可親　よみ（灯火（とうか）親しむべし）

書体＝楷書

習い方解説 (一)

小伏小扇

灯火可親
（灯火（とうか）親しむべし）

秋の夜は読書によい季節。今月から6回を担当させていただきます。6回とも楽毅論をベースにしています。形は斉整なたたずまいで、雅趣に富み、情感のこもった字です。

「**灯**」火へんとつくりの丁の位置に注意。丁のたて画はこの字の柱。

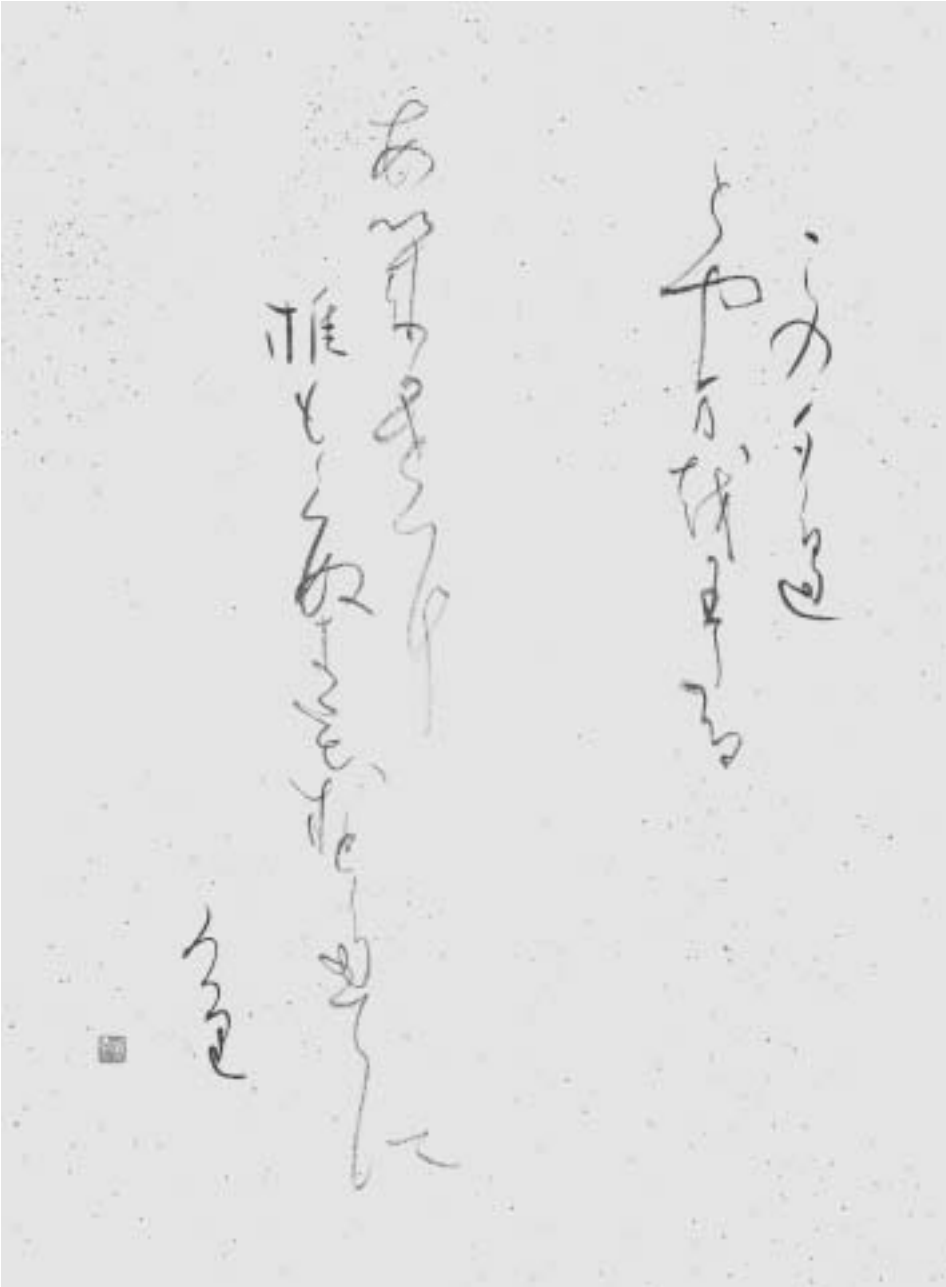
「**火**」三筆目は二点の中心左寄り左右同じ長さで右払いを重厚に。

「**可**」横画は中央でつり上げる。

「**親**」左右同じ面積に注意。扁のたて画で全体を支える。

かな規定　初段以上【十一月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

石井明子選書



よみ方　この夕べ(辺)とやま(万)を(越)わ(王)た(多)るあき(幾)か(可)ぜ(世)に(耳)
椎もく(久)ぬぎ(支)も(毛)お(於)とた(多)てにけ(介)り(里)

創作

習い方解説 (一)

石井明子

この夕べ外山をわたる秋風に椎もくぬぎも音たてにけり
（太田水穂）

かなを学ぶとき、その成立した平安初期へ遡り、漢字からどのような道を辿ってこのようなものになってきたか考えたいものです。幸い毎号、数頁前に「かな研究部」の古筆が載っているので、併せて練習するとお互いが参考になる筈です。

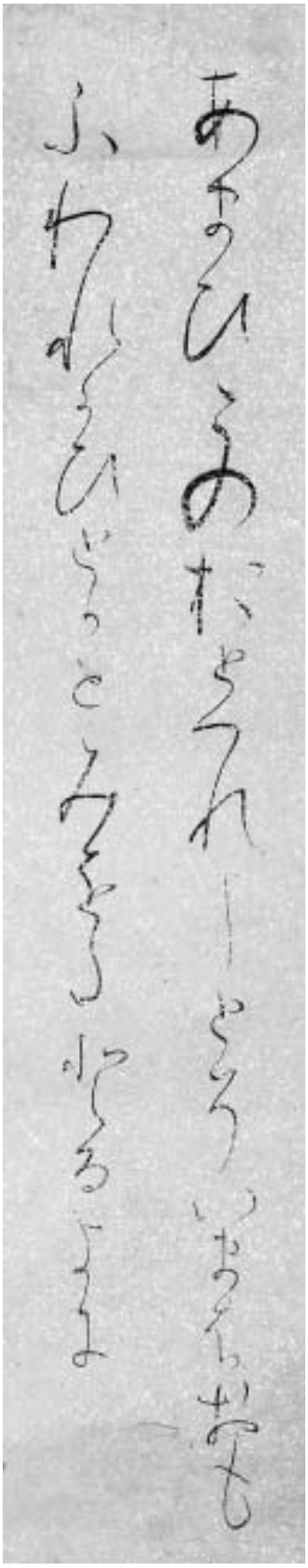
今を生きている私たちが表現するものには、常に現代性が求められます。題材が古典か現代のものかにはよりません。

上は太田水穂（一八七六―一九五五）の歌です。変体かなを多用し、行の長短、高低と動きで、余白を生かすことを心がけました。丁寧に運筆しましょう。

・変体かな…現在普通に使用される平がなとは違う字源またはくずし方のかな

かな規定　秀級以下　【十一月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。



高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　あまびこのお(於)とづれじとぞ(曽)いまは(者)おも
ふわれか(可)ひとか(可)とみをた(多)ど(登)るよに(尓)

かな条幅規定　【十一月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

天海矩子選書

よみ方　月み(見)れば(八)ち(遲)ゝに(爾)もの(物)こそ(所)か(可)な(奈)しけ(介)れ(連)
わが(可)身(三)ひと(一)つ(徒)の秋に(耳)は(盤)あらね(年)ど

創作

習い方解説 (一)

天海矩子

月みればちぢにものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど　（古今集）

物思いに沈む孤独な秋の感懐をうたっています。

創作をされる時は、全体の文字数を26文字、多くても28文字位にすると適当かと思います。余白が生きるようにして、必ず行の左右の文字バランスを考えてください。墨量と、どこで墨つぎをするかも重要な要素となります。

※たて形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【十一月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

洞庭秋月生湖心　層波萬頃如鎔金
（洞庭の秋月湖心に生じ　層波萬頃金を鎔かせるが如し）

広瀬舟雲選書

書体＝自由

習い方解説（一）

広瀬舟雲

横に伸びる線をゆったりと運筆し、さざなみで揺れ、湖面に映る秋の名月を意図して揮毫してみました。名月に照らされた湖水の波は、あたかも金を溶かしたようだとの意味です。八分隷で書く時は、文字の高さと幅を、横の文字と揃えて書いた方がバランスよく見えます。柔毛筆を用いました。

漢字条幅規定　秀級以下【十一月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

釣月耕雲（月を釣り雲を耕す）

横谷尚恵選書

書体＝自由

習い方解説（一）

横谷尚恵

「日本のこころ　茶席の禅語集」より題材を選びました。

月を釣り雲を耕す　道元

句意は「出来ぬと捨ててしまわず一歩づつ歩みを進めるとき、この語も大言壮語ともならぬ。」太目の羊毛筆、濃墨で書きました。

ペン字規定【十一月十五日締めきり】

川島舟錦選書

死と再生の詩
『千の風になって』は
いったい誰が
書いたのだろう
「千の風になって」より　…書

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (一)

川島舟錦

『千の風になって』より

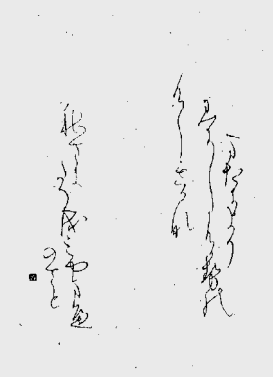
作者不明、英語で書かれた十二行の詩。「いつどこで生まれたのかわからない、風のような詩」を日本語訳し曲をつけた新井　満さん。どうしてそうするに至ったのか。『千の風になって』（講談社）にエピソードなどが書かれています。それらも抜粋し、ご紹介しながら、今回より6回担当させていただきます。

行書体は点画がやわらか、速く書けて読みやすいのが特徴です。漢字は大きめ、ひらがなはやや小さく、調和するように書いてみましょう。

※**落款**を入れ忘れないようにしてください。（落款は**自分の名前**を入れてください。）

今月のホープ作品 各部総評 NO.580

かな部　師範　宮澤　草秋
品格や美しさを出すには確実に基本を把握しなければなりません。濁りのない動きで美しさに感動！
◎かな部総評　創作に取り組むには文字の組合せや連綿の工夫を古筆より学んでいただきたい。ただ並べただけではダメです。（洋子評）



漢字条幅部　師範　渋谷　愛華
鶏毛筆による変化ある線質を生かし、帛書のスタイルでまとめる。安定感と暖か味ある表情に魅力。
◎漢字条幅部総評　条幅部は上級下級とも書体自由である。普段の学習のステップとして積極的に創意工夫を試みてほしい。（大雲評）

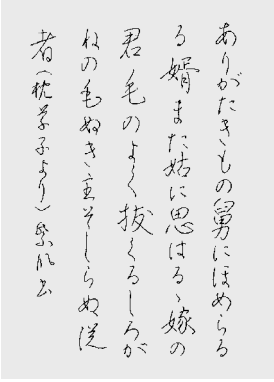
現代詩文書部　特選　小野原麻美
堂々たる運筆、練度の高い線質は見事の一言に尽きる。紙面の余白、落款もよし。…が印は一考。
◎現代詩文書部総評　単に文を書くと言う事でなく、作品としての表現を考えてほしい。（素雪評）

前衛書部　特選　金子　藤艶
粘りあるゆったりとした線、そして強さと流れを持続しながら最後まで気持ちを貫通させた傑作。
◎前衛書部総評　色々な作に挑戦され益々向上。さらに印の大きさ、位置等に注意を！（光昭評）

かな条幅部　準師範　西巻サト子
静かな表現で見飽きない力を湛えています。書きすぎないことは目指すところです。理知的で秀逸。

◎かな条幅部総評　難しい課題にやや悪戦苦闘が目立ちました。手本は学んで、消化して、自分の表現を心がけてください。（明子評）

ペン字部　師範　亀井　紫風
力まず楚楚とし温和。運ペン柔らかく穏やかな呼吸、魅力、妙味ある作に賞します。
◎ペン字部総評　上位作は丁寧に書いている。また自運作が多くありました喜ばしい限りです。下級位の方も更なるご研鑽を。（宏華評）



漢字部　師範　西川　藤象
筆先よく利いてリズムに乗って強く紙を切って明快な筆法。余白の白が輝いて美しい。快作。
◎漢字部総評　画の長短や字形の理解はわかり易いが、臨書はそのリズムを読みとらなければ書者の香りをつかめない。（春洋評）

今月の特別研究部優秀作品（特選）

工藤永翠書

60×180㎝

現代詩文書

（白珠）工藤永翠

宮沢賢治
〝いちょうの実〟より

◆鋭い感性で細線を駆使して光をまき散らす。一・二集団は直線に目に飛び込み、三集団で少し落ちつき終末は見事な収め方を見せる。（春洋評）

◆いつもながら感性の鋭さと構成の絶妙さに敬服。細線の冴えが要所を引きしめる潤筆部と相乗してリズムを奏でる。落款のまとめもよい。（大雲評）

◆筆を使う時の力の入方によって細い線の中に墨だまりが出来、口ずさみ乍ら詩を書き、書き終った時にこの一枚の紙の中に収まって見事。（倫子評）

◆トロトロに磨った墨の力をその繊細な筆致で見せられて楽しい。まさに何色もの色が見えます。手の内にあるものは無理がなく魅力的です。（明子評）

前衛書

（蓮紅）遊佐紅雅

「飛翔」

◆超長鋒筆の弾力と瞬発力を生かし、動きある表現となった。やや未消化な線が目立ち騒しさを感ずる。余分な動きを削ぎ落してみては。（大雲評）

◆鋭く筆先を生かし全身の動きを表現した力強さは素晴らしい。一寸欲を言うと少し止った動きを表現して見ると息つぎが出来るのでは。（倫子評）

◆前衛書は深い思考と個性ある筆遊びの極致と常に憧れを抱いて見せていただいています。生まれてしまった作品の力を満喫しましたね。（明子評）

◆上部が、しっとりと落ちつきを見せ下部の動きの部分が少し軽いのではないかと思わせるが、秋の空への飛翔は感覚的にはわかる気がする。（春洋評）

遊佐紅雅書

180×60㎝

総評

今月は80点（漢16、か7、現28、前28、篆1）の出品がありました。出品者に常連の方々が目につきます。毎月意匠を凝らして、新しい作を創造する姿に敬意を表します。

シルバーウイークを使い山東省を訪問しました。鄭碑三山、曲阜、済寧、泰山、青島を巡り、碑刻と墨跡を満喫してきました。長い歴史を経て、今日に到るまで高い評価を与えられている名筆に接し、身振いする感動を覚えます。我々が学ぶべき資料は豊富です。幅広い学書を通して、しっかりとした基礎の上に、書の創作を展開しましょう。深い内容を盛り込んで。

（萬城）

〈特選候補者〉

漢　一弦　木村　貴衣
〃　華祥　安藤　華祥
〃　炎佳　佐藤　華炎
か　如月　治田　芳江
〃　書泉　山本由美子

現　游水　荒川　空華
〃　鳳鳴　後藤　歩
〃　前　蓮紅　大友　紅蓉
〃　湘南　佐藤　詠子
〃　蓮紅　浅野　彩紅

漢字

（恵雅）

板倉雅邦

「千峰鳥路含梅」

板倉雅邦書

176×58㎝

◆高度に計算された構成を培われた技術と深い思いで形にする表現力は見事です。輝く余白が作者の余裕とも思える楽しさを伝えて快い。（明子評）

◆縦長直線構成で、字形の大小、潤渇で、行間の余白を印象づける。線そのものは案外単調であるが、リズムと線の切れで見せる。意図理解。（春洋評）

◆二本連筆でねばりある線質に変化を見せて妙。思い切った余白を取り入れ凝縮と開放感を鮮明にする。渇筆がやや上滑りしたか。（大雲評）

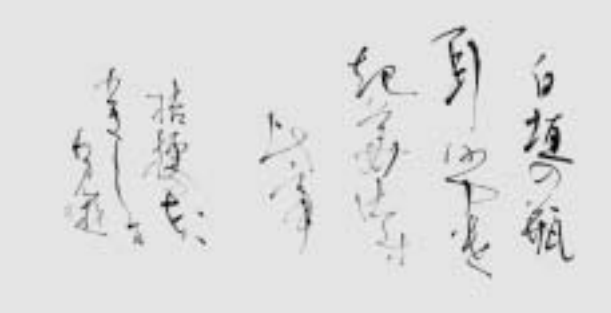
◆余白が計算されたように生かされているのが素晴らしい。墨の使い方によってかすれが使われているからか、少し軽くなり過ぎた感がある。（倫子評）

かな

（卯月）

栗原信子

「しらはにの…」



栗原信子書

70×136㎝

◆切れがよいのに痛くない線への集中は高い美意識に支えられていて天晴れ。また、字粒、粗密の変化で、限りなく広がりを感じさせて快作。（明子評）

◆このグループのリズムと強い線質に豊かな心の動きを感ずるのは私だけだろうか。今後の方向を注目して見守りたいと思う。（春洋評）

◆前半の大きく広がる表現から後半のやや引き締めた集団の構成が魅力的。鋭く切り込む線の響きが、適度な潤渇の変化で昂まりを見せる。（大雲評）

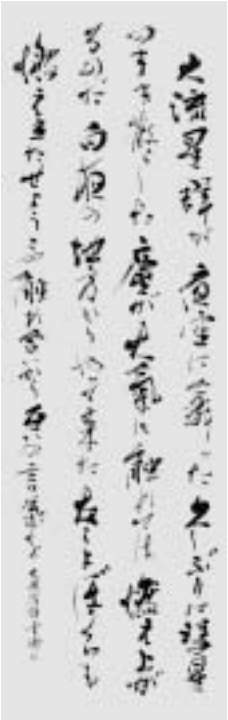
◆筆の動きに自分を入れて体全体で表現された感じがする。穂先の切れ味の鋭さは速度と共に美しく書を観賞すると共に口ずさみたくなる。（倫子評）

現代詩文書

（大雲）

神谷雲卿

「大岡信詩」



神谷雲卿書

172×55㎝

◆現代詩文を坦々と書きながら情感を盛り込んでいく。従来の漢詩作品と同じ伝統的な手法である。詩に対する感動が個人のリズムを生むか。（春洋評）

◆二×六尺に四行構成はやや平凡ながら、大小潤渇の変化により軽快なリズムを醸し出す。線の切れ味が更に加わればと思う。（大雲評）

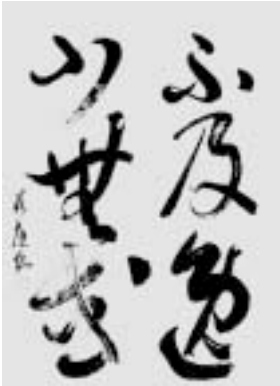
◆墨だまりとかすれの位置が計算されたようにこの数多い文字の組みたてが出来たのは日頃の書に取り組む姿勢の結晶のようだ。（倫子評）

◆安定したタッチで貫かれた筆の力には敬意を表します。さらに詩の心を深く読んでどこかに破れを見せてほしいと思うのは私の欲張りか？（明子評）

漢字研究部（書譜）

選評　大野祥雲

今月のホープ作品



宮坂萩庭

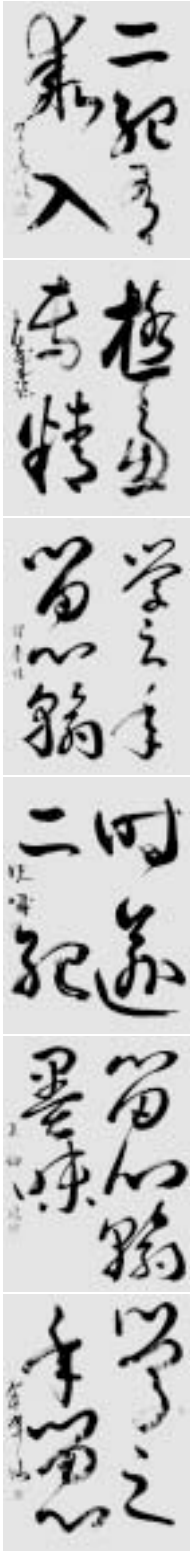
漢字研究部　特選　宮坂　萩庭

この作品、臨書でありながら創作に近い雰囲気があります。書譜のリズムを自分のものとし、潤渇、太細、疎密など考え、大胆なまとめとなりました。文意も献之と羲之の優劣のところ。筆者の筆意が伝わってきます。

◎漢字研究部総評

私たちは、臨書によって用筆法、運筆法を学び、書の表現力を高めます。書譜は連綿の少ない独草体。変化と統一、流動美を習得するにはまたとない教材です。

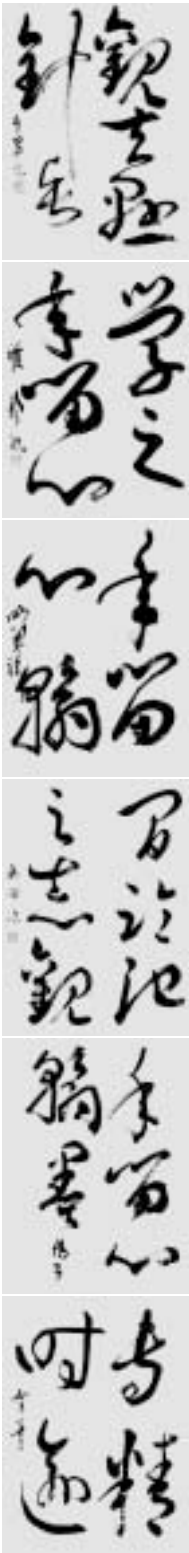
競書作品は、伸びやかに動きのある作品が多く、いい傾向だと思いました。一方、気になる点もあります。○筆の弾力を生かした深い線の作品が少ない。○正しい筆順で正確な文字を。疑（剥落のためか、わかりにくい。九月号参照）、他に留、墨、鍾、慮など。



紫泉　花城　輝峯　洸城　美紬　蒼峰

珠江　佳鶴子　江春子　雪篁　須美子　桂彩

龍舟　嵐泉　久子　雲卿　由紀子　富美子

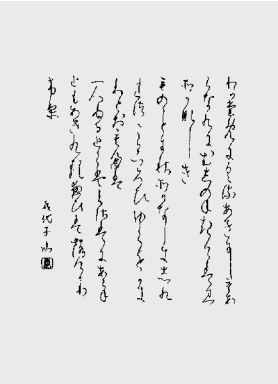


千翠　雅邦　明琴　藤谷　陽子　雪華

かな研究部
（関戸本古今集）

選評　山藤　美知子

今月のホープ作品



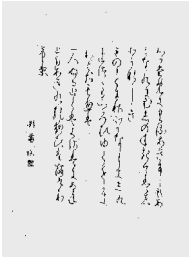
百木野喜代子

かな研究部　特選　百木野喜代子

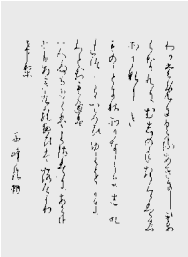
豊かな墨継ぎと渇筆との幅が広く、リズムの変化で生き生きとした筆さばきも関戸の特徴です。よく表現でき秀作。料紙は鳥の子で滲みはなく一考を。

◎かな研究部総評

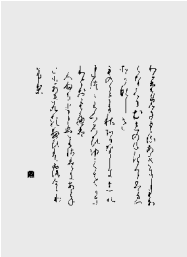
総体的に臨書としてはレベルは高いですが、書きはじめる前に手本をよく見て課題の古筆と他の古筆との違いを把握してください。特徴のない作多く残念。



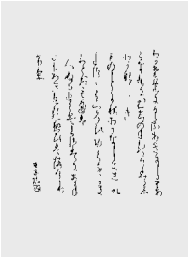
彩華　嵐泉　瑶雲



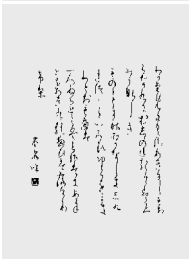
千峰　幸平　たえ子

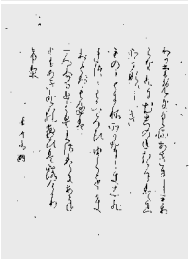


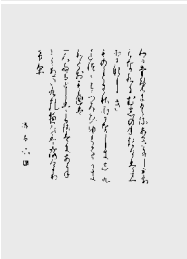
雅泉　昌子　哲子

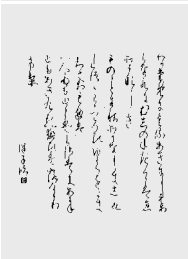


睦子　洋子　美佐枝









かな研究部成績表

特選

椿翠　千葉月　卯大　澄翠　竜正　秀五　やま　A I　竜道　澄翠　大卯　千椿　東蓮　正大　正玉　硯大　誉京　椿竜　正秀　五葉　やま　A I　竜道　澄翠　大卯　千椿
向紅　華雲　雲華　松水　雲田　橋翠　泉華　明葉　ま　I　泉　春吟　雲月　葉翠　向紅　華雲　松水　雲田　橋翠　泉華　明葉　ま　I　泉　春吟　雲月　葉翠

百木野喜代子　山谷　新西　平谷　長内　宮谷　鈴木　高橋　田村　藤玉　森田　岩崎　星野　小林　吉水　小田　宮下　森野　木澤　友田　伊原　遊山　畠佐
百木野喜代子　山谷　新西　平谷　長内　宮谷　鈴木　高橋　田村　藤玉　森田　岩崎　星野　小林　吉水　小田　宮下　森野　木澤　友田　伊原　遊山　畠佐
嵐彩　瑞雲　川峰　千平　幸内　哲子　昌泉　雅子　睦子　洋子　佐枝　晃宝　龍子　佑代　理子　理子　祥泉　草秋　輝雲　游子　英雅　紅香　芝香
嵐彩　瑞雲　川峰　千平　幸内　哲子　昌泉　雅子　睦子　洋子　佐枝　晃宝　龍子　佑代　理子　理子　祥泉　草秋　輝雲　游子　英雅　紅香　芝香
荒東　孫花　寿光　英英　功子　子子　子二　華　木澤　藤藤　田原　川澤　下野　田林　水小　宮森　小吉　小泉　星岩　野崎　美　洋睦　子子　哲昌　子子　雅泉　子子　功子　寿光　英英　功子　子子　子二　華　木澤　藤藤　田原　川澤　下野　田林　水小　宮森　小吉　小泉　星岩　野崎　美　洋睦　子子　哲昌　子子　雅泉　子子　功子　寿光　英英
阿久　澤隆　井伊　関上　梨霞　畠山　遊佐　伊藤　友田　木原　小川　宮澤　森下　小野　吉田　小林　泉水　星野　岩崎　森野　田玉　藤村　高橋　鈴木　宮内　長谷　大川　卯西　千谷　百木　山野　平喜　新瑞　月雲　葉翠　千峰　大川　卯西　千谷　百木　山野　平喜　新瑞　月雲　葉翠
阿久　澤隆　井伊　関上　梨霞　畠山　遊佐　伊藤　友田　木原　小川　宮澤　森下　小野　吉田　小林　泉水　星野　岩崎　森野　田玉　藤村　高橋　鈴木　宮内　長谷　大川　卯西　千谷　百木　山野　平喜　新瑞　月雲　葉翠　千峰　大川　卯西　千谷　百木　山野　平喜　新瑞　月雲　葉翠

秀作（60音順）

A　京　松　椿　椿　椿